

自己に関する研究

……「自己とは何か」の質問調査結果の分析

明治鍼灸大学 人文・社会学教室

多田 建治

要旨：鍼灸を専攻する大学生，短大生，専門学校生，357名について，「自己とは何か」という質問を出し，その答えを自由記述方式で白紙に書いてもらい，その結果を分析した．その答えは，私の歴史，自己概念，理想的自己，自己の一般的定義の4つのタイプにわけられ，さらに細かく11のタイプにわけられた．自己についての答えの型と性との関係はあまりみられず，年齢との関係は，レヴィンソンの発達段階の年齢区分により，違いがみられた．また，Y-G性格検査で，情緒の安定した群と情緒の不安定な群に対応した自己についての答えの型が少し見出された．そして，ロールシャッハテストのM反応との関係は明確ではなかった．

Studies on the Self

Analysis of the Data using Investigative Question: "What is the Self"

Kenji TADA

Department of the Humanities and Social Sciences, Meiji College of Oriental Medicine

Summary: Subjects of this study were 357 college, junior college and professional school students of oriental medicine, aged 18-41. Subjects were asked to describe freely their answers to the question, "What is the self?" or "Who am I?" Four types of answers were found: one's history, self concept, ideal self and general definition of the self. No sex difference in the types of answers was seen. But about age, the types of answers were different by the developmental stages of Levinson, D. Also, the types of answers were a little different between emotionally stabled and unstabled group of Yatabe-Guilford personality inventory. As for the relationship to M-response in Rorschach test, expected result was not found.

Key Words: 自己 self, Y-G性格検査 Yatabe-Guilford personality inventory, ロールシャッハテスト Rorschach test

I 問題・目的

心理学において、自己という言葉はよく用いられるが、その言葉は非常に多義的であり、曖昧な点が多く含まれている。その意味内容とするところも学者により違いがあり、例えば、フロイト (Freud, S.)¹⁾ の自己は、自分自身 (das Selbst) としての有機体、生物体を意味するが、心理的機能を表わす自我 (das Ich) と区別し得ないものである。またロジャーズ (Rogers, C.)⁶⁾ の自己は、自ら及び周りの重要な人々との関係についての知覚、具体化された自己像、すなわち自己概念 (self concept) のことであり、ユング (Jung, C. G.)³⁾ の自己は、意識と無意識の双方を含めた心 (psyche) の総体であり、対立する心の要素を統合する機能を行うもので、抽象的であるが、マンダラや予言者や救世主、英雄とその好敵手、王と王妃の結婚などの象徴的表現により把握できるものである。

自我と自己の区別も不明瞭であり、例えば、同一性 (identity) について言えば、自我同一性と自己同一性は、同じものなのか、異なるものなのか、どういう関係にあるのか、といったことに対して、明確な論議さえなされていない。

本邦において出版されている心理学 (このことに関して重要な隣接領域としての精神医学も少し含めて) 関係の辞典を調べてみると、自己という項目が記載されているものには、心理学辞典 (ミネルヴァ書房)¹⁹⁾、心理学辞典 (北大路書房)¹²⁾、心理学小辞典 (有斐閣)¹⁷⁾、誠信心理学辞典 (誠信書房)²⁰⁾、心理学小辞典 (協同出版)¹¹⁾、新教育心理学辞典 (金子書房)²⁴⁾、教育心理学新辞典 (金子書房)²³⁾、精神医学大事典 (講談社)¹⁸⁾、精神医学事典 (弘文堂)⁹⁾、精神分析学辞典 (育文社)¹⁶⁾、精神科ポケット辞典 (弘文堂)¹⁰⁾、情緒障害事典 (岩崎学術出版社)²¹⁾、児童臨床心理学事典 (岩崎学術出版社)²²⁾、乳幼児発達事典 (岩崎学術出版社)¹³⁾、幼児保育学辞典 (明治図書出版)¹⁵⁾、児童学事典 (光生館)¹⁴⁾ などがある。項目数の多い大型の新版心理学事典 (平凡社)⁷⁾ をはじめ、いくつかの辞典では、

自己という項目はなかったり、自我という項目の中に含まれていたりする。

これらの辞典のなかの自己という項目の記載について、ほぼ共通してみられる自己の定義内容としては、1) 主体である自我によって知覚された客体としての自分、2) 主体としての自我が、これこそ自分の本質的なものと認める中核的なものという2点である。しかし、この自己の記述も、辞典によって、かなり異っているのが、断定的には言えない。

自分というものを、主体である主我 (I) と客体である客我 (Me) に分けて考えたのは、ジェイムズ (James, W.)²⁾ であり、主体である I が自我、客体である Me が自己、というように考えてよい。また、ジェイムズは、広義の自己を個人が自分のものということが出来る全てのものであると規定し、それを次のように3種類に分類した。(1) 物質的自己、身体的自己を含み、自己の身体、衣類、家族、家、財産、所有物など。(2) 社会的自己、他の人から受ける認知、彼を知る人の数だけ社会的自己を有することになる。また、名声や名誉など。(3) 精神的自己、客体化できる個人の内的なもの、心的能力または心的諸傾向、すなわち論証や識別の能力、道徳的感覚、良心、不屈の意志など。

ジェイムズの述べているのは、主として自己の内容であり、別の言葉でいえば自己概念に相当する。このように、自己という言葉と同じ意味、あるいは自己の別の定義、内容などを表わす言葉には、自己概念の他に、自己像、現象的自己、自己意識、自己評価、自己知覚、自己認知、現実自己と理想自己など、さまざまな言葉がある。

また、社会学や哲学の領域では、自己は自我と区別されてなく、同じ意味で取り扱われ、自己よりも自我の方が主に使用されている。一方、心身医学や、身体への働きかけを含む心理療法の立場 (バイオエナジェティックス、ゲシュタルトセラピー、ホロトロピックセラピーなど) では、自己は心 (自我) と身体を包含したものとしてみとらえられ、自己は環境と対立する両極性

(polarity)の一方のものとしてとらえられる。さらに医学では、例えば自己免疫のように、心や精神を考えずに、身体そのもの、生物体そのものを表わすことが多い。

自己は、自己そのものよりも自己概念、自己像、自己意識、自己評価のような具体化されたものとして把握され易いのであるが、これらを測定するための方法としては、直接質問する20答法またはW A I (Who Am I) (自己概念を測定する)、評定法としての自己評価法(現実自己と理想自己)や Self Differential (自己概念、現実自己)、分類法としてのQ分類法(自己概念、現実自己と理想自己)、投影法としての Image Question (自己像)などが考案されてきている。しかし、自己の本質的なものと附随的なもの、自己をとらえる観点、側面、あるいは次元といった立場からそれぞれ問題点があり、自己という多義的で複雑なものが、これで済まされるわけではない。

そこで、本研究では、根元的(primitive)な質問として「自己とは何か」ということを直接尋ね、それに対して全く自由に記述してもらう自由記述法を試みた。この質問に対して、どう答えるか、あるいはどう受けとって解答するかを分析するわけである。この方法は、どちらかと言えば、20答法、W A Iに近い方法であるが、私は誰かというように規定しないで、より広く自己をとらえようとするものである。具体的には、質問に対して記述された答えをいくつかのカテゴリー(タイプ)に分類して、Y-G性格テスト、ロールシャッハテスト等の性格テストとの関連性を調べ、どんな性格の人が自己をどんな風に記述していくのかを調べようとするものである。

II 方 法

被検者は、鍼灸を専攻する大学生23名(男子17名、女子6名)、短大生109名(男子96名、女子13名)、専門学校生225名(男子187名、女子38名)、計357名。年令は、18~41才で42才以上の者は数が少ないので除外した。

心理学、臨床心理学の授業の最初の時間に、アンケート形式で白紙をわたし、「自己とは何か、自分とは何か」について自由に書いてもらうように教示した。所要時間は、20~30分(30~40分かけて、他の質問と一緒にいった)。また、数カ月以内にY-G性格検査、一部の者には、ロールシャッハテスト集団法(スライドを用いて、各図版、3分、自由反応段階のみ)を実施した。

自由記述による「自己とは何か」という質問に対する答えはいくつかのカテゴリー(タイプ、型)に分類し、性、年令との関係を調べた。そして、Y-G性格検査の各尺度値および類型と自己についての答えの型との関連性を調べた。また、自己や自己概念の指標といわれているロールシャッハテストのM反応の数と自己についての答えの型との関連性を調べた。

実施日時は、昭和58年4月~昭和61年12月の間で、それぞれ11の実施集団により異なる。なお、自己に対する質問の答えが、例えば「自己とは自己にすぎない」、「自己とは自分である」、などと答えになっていない不適当な者や、Y-G性格検査をうけていない者は除外してあり、357名の中には含まれていない。

III 結果と考察

(1) 「自己とは何か」の質問に対する答えを分類した結果は表1に示してある。自由記述方式なので、2ヶ以上のカテゴリーが含まれている場合には、最初に記述されているものを主タイプ、後のものを付加タイプとした。そしてC T_±、C Sとか、D P、D Q、Iのように記号化した。ただし、全体を読んでみて、後から記述したものが、最初のものよりもより重要性をもって書かれていて量も多い場合には、後の方を主タイプとした。

(2) 357名の自己についての答えの主タイプのみを取りあげ、各型の人数を調べたものは、表2、表3に示してあるが、H 8名(2%)、C 123名(34%)、I 23名(6%)、D 203名(57%)

表1 「自己とは何か」の答えの分類(タイプ)

H	私の歴史 生活史 過去からの歴史 私は小さいとき… 今度鍼灸をめざして…
C	自己の内容、概念(個人的、具体的)
CT	特性 <ul style="list-style-type: none"> CT+ 自分はすばらしい、陽気だ。 CT- 自分はだめだ、くらい。 CT± 両面について述べる。
CP	身体的 身長○○cm、病弱である。
CS	社会的身分、長男である、名前は○○。 ○○才の一人の女性、鍼灸師である。
I	理想的自己 こうありたい願望(内容、概念) こういう人間になりたいと思っている。 信念をもって生きていく人でありたい。
D	自己の定義(一般的、普遍的)
DP	哲学的 精神であり肉体である。 意識するから自分である、自分の心身である。
DU	宇宙論的(macro) 宇宙のなかの一つの生命、人類の一員である。
DQ	疑問形 自己は不可解なもの。 自分でもわからないもの。
DV	価値的 この世の中で一番大切なもの。
DS	構造的(性格構造)多数の性格で出来ている。 考えや人格の総体、「偽の自分」と「本来の自分」とがある。
DF	機能的 毒にも薬にもならぬもの、世の中に 少しでも役に立つことの出来る生物、目的 をもって生きているもの。

%)であった。また、Cについては、CT 98名(27%)、CPは主タイプとしてはみられなかったが、付加タイプとしてはみられた。CS 25名(7%)であった。Dについては、DP 106名(30%)、DU 18名(5%)、DQ 12名(3%)、DV 5名(1%)、DS 23名(6%)、DF 39名(11%)であった。「自己とは何か」の質問に対する答え方としては、哲学的、抽象的な定義、性格特性(自己概念)で答えたものが多かった。また、機能的定義、身分、地位などの社会的自己、構造的定義、理想的自己などの答えも少なからずみられた。

表2 自己についての答えの型と性との関係

	男	女	計
H	6 (75%)	2 (25%)	8 (100%)
C	103 (84%)	20 (16%)	123 (100%)
I	21 (91%)	2 (9%)	23 (100%)
D	170 (84%)	33 (16%)	203 (100%)
計	300 (84%)	57 (16%)	357 (100%)

χ^2 -test ですべて $n, s.$

(3) 自己についての答えの型と性との関係は、表2に示してある。男子でIが、女子でHが相対的に多くみられる傾向があったが、全て統計的に有意ではなかった。

(4) 自己についての答えの型と年齢との関係については表3に示してある。この年齢の区分は、レヴィンソン(Levinson, D.)⁵⁾の「人生の四季」における成人前期の発達段階を採用している。

表3より18~22才の青年後期では、Cが有意に多く、Dは有意に少ない。また、Hも少ない。23~27才の大人の世界へ入る時期では、Dが有意に多く、Cが有意に少ない。そして、34~41才(レヴィンソンの区分では、40才までだが、41才まで含めた)の一家を構える時期では、Iが有意に多く、Dも多く、Cが有意に少なかった。また、Cの中では、CTが18~22才で有意に多く、34~41才で有意に少なかった。Dの中では、DPが23~27才で有意に多く、DUが18~22才で少ない傾向がみられた。

以上より、青年後期では、自己を自己概念としてとらえる傾向がみられるのに対して、成人前期では、自己を一般的、普遍的な定義、哲学的、抽象的な定義としてとらえる傾向がみられた。また、中年期に近づくにつれて、HやIの型も増加し、自己の生活史や理想的自己としてとらえる傾向がわかった。この点に関する考察の一要因として、被検者の特殊性もあげられる。この被検者群の中年期に近い人達の多くは専門学校生であり、何か

表3 自己についての答えの型と年齢との関係

	18~22才	23~27才	28~33才	34~41才	計
H	2 [△] (25%)	1 (13%)	2 (25%)	3 (38%)	8 (100%)
C	99*** (81%)	10* (8%)	8 (7%)	6*** (5%)	123 (100%)
I	14 (61%)	1 (4%)	1 (4%)	7* (30%)	23 (100%)
D	113*** (56%)	36** (18%)	20 (10%)	34 [△] (17%)	203 (100%)
計	228 (64%)	48 (13%)	31 (9%)	50 (14%)	357 (100%)
CT	83*** (85%)	8 [△] (8%)	6 (6%)	1*** (1%)	98 (100%)
CS	16 (64%)	2 (8%)	2 (8%)	5 (20%)	25 (100%)
DP	61 (58%)	21* (20%)	8 (8%)	16 (15%)	106 (100%)
DU	8 [△] (44%)	3 (17%)	2 (11%)	5 (28%)	18 (100%)
DQ	7 (58%)	2 (17%)	2 (17%)	1 (8%)	12 (100%)
DV	3 (60%)	0 (0%)	2 (40%)	0 (0%)	5 (100%)
DS	12 (52%)	4 (17%)	3 (13%)	4 (17%)	23 (100%)
DF	22 (56%)	6 (15%)	3 (8%)	8 (21%)	39 (100%)

χ^2 -test で ***P<0.001 **P<0.01 *P<0.05 [△]P<0.10

表4 自己についての答えの型とY-G検査の各尺度得点(平均値)との関係

	人数	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
H	8	7.4	8.8	6.0	8.8	5.8	5.3	11.3	13.4	9.8	11.1	8.3	11.1
CT	98	8.7	9.8	8.0	9.4	7.9	7.1	11.6	11.5	12.1	10.0	9.9	13.0
CS	25	7.2	8.0	6.1	7.8	5.9	6.0	11.3	12.3	12.2	10.8	8.8	13.5
I	23	8.0	8.0	6.0	7.2	6.4	5.5	11.4	12.5	11.4	11.0	11.2	14.0
DP	106	7.4	8.6	6.5	8.5	6.9	6.1	11.6	12.6	11.9	10.8	10.1	13.7
DU	18	6.2	7.6	5.5	7.9	6.4	5.3	11.8	14.9**	11.4	10.6	12.7*	14.9
DQ	12	10.6	12.4**	9.1	9.4	7.3	7.7	11.0	8.5**	11.4	9.8	10.7	11.2
DV	5	9.8	12.2 [△]	7.0	10.8	7.4	10.0 [△]	13.4	13.0	13.2	11.0	12.4	17.0 [△]
DS	23	9.9	9.6	9.1 [△]	9.3	8.2	7.3	10.8	10.1*	10.7	9.7	8.5	11.5 [△]
DF	39	7.9	9.7	7.4	9.1	7.4	8.2	12.0	12.1	11.9	10.1	9.6	13.5

t-test で ***P<0.01 *P<0.05 [△]P<0.10

目的をもって、ある種の理想的願望をもって現状を打破し、新しい分野のことを勉学しようと決心して専門学校を入学してきているとも考えられる。

また、性格特性でもって自分を見つめようとするのは青年期の一つの特徴といえ、成人前期に入ると、自己の性格特性をあれこれ考えるより、日常

表5 自己についての答えの型とYG検査5類型との関係

	A 類	B 類	C 類	D 類	E 類	計
H	0 (0%)	1 (13%)	2 (25%)	4 (50%)	1 (13%)	8 (100%)
CT	22** (22%)	20 (20%)	8 (8%)	37 (38%)	11 (11%)	98 (100%)
CS	1 (4%)	2 (8%)	4 (16%)	15 (60%)	3 (12%)	25 (100%)
I	1 (4%)	6 (26%)	3 (13%)	12 (52%)	1 (4%)	23 (100%)
DP	16 (15%)	18 (17%)	13 (12%)	53 (50%)	6 (6%)	106 (100%)
DU	1 (6%)	1 (6%)	2 (11%)	13* (72%)	1 (6%)	18 (100%)
DQ	2 (17%)	3 (25%)	2 (17%)	3 (25%)	2 (17%)	12 (100%)
DV	0 (0%)	2 (40%)	0 (0%)	2 (40%)	1 (20%)	5 (100%)
DS	2 (9%)	5 (22%)	4 (17%)	7 (30%)	5 [△] (22%)	23 (100%)
DF	7 (18%)	11 (28%)	3 (8%)	16 (41%)	2 (5%)	39 (100%)
	52 (15%)	69 (19%)	41 (11%)	162 (45%)	33 (9%)	357 (100%)

χ^2 -test で **P<0.01 *P<0.05 Δ P<0.10

生活の多忙さの中で防衛的になり、抽象的に距離をおいて自己を記述していると思える。

(5) 自己についての答えの型とY-G性格検査各尺度得点との関係については、表4に示してある。この結果から、DUでは一般的活動性、支配性が有意に高く、協調性や社会的外向性が高く、抑うつ性や劣等感は低い傾向がみられ、安定したパーソナリティを示している。また、Y-G検査5類型との関係をみた結果(表5に示す)でもD型が有意に多かった。

DUは、自己を宇宙のなかの一つの生命とか、人類の一員のように非常にmacroな視点、宇宙的観点からとらえたもので、性格特性や社会的自己などの機能的な自我のレベルにとらわれない、より発達した意識存在のレベル、或は、より発達した自己のレベルにあると考えられる。もっとも、自己とは何かという問に対してこう答えた者が、ウィルバー(Wilber, K.)⁸⁾の言う、意識の超個のレベルの存在を示すものと直結して考えるわけにはいかないだろう。DUの年齢構成は、18~22才が8名(うち女子1名)、23

~27才が3名、28~33才が2名、34才~41才が5名(うち女子1名)で、18~22才で少ない傾向(P<0.10)がみられ、34~41才ではやや多い傾向がみられる。どちらかといえば、年齢の高い人に、また男子の方に多く見られた型であることも肯定できる結果である。

つぎにDQでは、一般的活動性が有意に低く、気分の変動を示す回帰性が有意に高く、抑うつ性や劣等感も強い傾向がみられた。また、DSでも一般的活動性が有意に低く、社会的外向性が低く、劣等感が強い傾向がみられた。そして、どちらの型もY-G性格検査5類型(表5)では、E型の割合が高い。これら2つの型は、自己のとらえ方が不明確で、しっかりと自己をとらえていない点が共通している。自己のとらえ方の不明確さは、情緒の不安定さや一般的活動性の低さに関係しているのではないだろうかと思う。

DQ、DSの型は、年齢では、18~22才が少なめで、28~33才の30才の過渡期に少し多い。また性別では女子に少し多い。28~33才の30才の過渡期は、レヴィンソンによれば、「いまの生活を

変えるなら、いますぐ始めなければ手遅れになる。20才前半に築いてきた生活構造を満足のいくように修正したり、将来の成功への希望をたくして、新たに人生のコースを変更する最後のチャンスであり、ある意味でストレスに満ちた重要な段階」である。就職や結婚により、新しい生活構造を築きあげたものの、果たしてこれでよいであろうか、自分は一体何者だろうかという迷いがありながら、一方では、どうにも身動きならぬ余裕のない時期である。この時期に専門学校に入り、新しい専門を勉学しようとする人に、こうした自己のとらえ方の不明確さ、迷いのようなものがみられても不思議ではない。

一方、人数が少ないので明確に言えないが、DVでは回帰性が高く、協調性がなく、社会的に外向的な傾向がみられた。これは、一面では自己中心性を表わしていると考えられる。この型も28~33才の30才の過渡期に5人のうち2人(40%)もみられている。

(6) ロールシャッハ・テストは、357名のうち、156名についてのみ実施している。全て、スライドを用いた集団法で行い、自由反応段階のみを白紙に書いてもらった。その結果について、片口⁴⁾の「心理診断法詳説」に従ってM反応(→Mも含む)をスコアリングして、Mの数を問題とした。自由反応段階でM反応と記号化するものは、~しているという動作や、姿勢などの反応であるが、「踊り」、「ダンス」などの名詞形の反応も、明らかにそこに運動が含まれると予測でき、質疑段階を実施すると多分に運動反応になるであろうと思えるので、M反応としてとりあげた。

Mの多い群(M \geq 3)と、Mの少ない群(M \leq 2.5)の2群にわけて、自己についての答えの型との関係を示したのが、表6である。全て有意差はなかったが、I、DでM反応が少し多くみられ、H、Cでは少ない傾向であった。つまり、自己のとらえ方が抽象的、定義的な者の方が、Mが多い傾向であり、この結果は、Mが自己概念を表わすというロールシャッハ解釈の通説に従えば、当然CやHの方がM反応が多いであろうという

表6 自己についての答えの型とロールシャッハM反応との関係

	M \leq 2.5	M \geq 3	計
H	3 (100%)	0 (0%)	3 (100%)
C	28 (44%)	36 (56%)	64 (100%)
I	3 (33%)	6 (67%)	9 (100%)
D	31 (39%)	49 (61%)	80 (100%)
計	65 (41%)	91 (59%)	156 (100%)

χ^2 -test ですべて n, s.

予想に反するものであった。この点については、ロールシャッハテストのM反応は、内省、空想、創造性、共感性などの内的な豊かさや、無意識的な本人が明確に意識化していない自己を表わしているのに対して、自己とは何かという質問に対する答えでは、意識的にコントロールした、表面的につくろった、自己を表わしていると考察する。

(7) 次に、CT群で、CT $+$ 、CT \pm 、CT $-$ の3群にわけて、ロールシャッハテストでのM反応の多少との関係を示したのが表7である。CT \pm ではMが多く、CT $-$ ではMが少なかったが有意ではない。自己の特性の良い面、悪い面ともに把握できる者の方が、ロールシャッハテストのMで示される内的豊かさを示しているのは、自己の発達上からみて(例えば、ユングの shadow を意識化して統合するという観点など)肯定できる結果である。

表7 自己についての答えの型、CT群の3つの型とロールシャッハM反応との関係

	M \leq 2.5	M \geq 3	計
CT $+$	5 (50%)	5 (50%)	10 (100%)
CT \pm	10 (36%)	18 (64%)	28 (100%)
CT $-$	12 (57%)	9 (43%)	21 (100%)
計	27 (46%)	32 (54%)	59 (100%)

直接確率計算法、 χ^2 -test ですべて n, s.

(8) この研究での方法上の問題点として、まず、被検者が、鍼灸を専攻する者、鍼灸師をめざす人に限られていること、それゆえ、この結果は必ずしも一般的なものとは言えない。鍼灸師をめざす人の自己のとらえ方の結果と言った方が妥当かもしれない。一方、心理学の講義をまだ全く行っていない時点でアンケートを行ったし、又、鍼灸を専攻する人の殆んどは、その時点でユングやロジャースなどの自己に関する本を読んでいない点で、その人なりの自己のとらえ方を調査できた点はよかったと思う。

次に、被検者の男女比、年齢構成の偏りがかなりみられるので、その点は今後の研究で考えていきたい。又、被検者によって、記述する量が多い人と少ない人の差があり、こゝでは主タイプしかとりあげなかったが、付加タイプでも本人にとっては重要な意味をもつ場合も考えられる。そして、様々のタイプを記述出来る人は、多様な自己の側面を把握できるという点で、何らかのパーソナリティ上の優れた面が考えられるかもしれない。

また、表1で「自己とは何か」の答えの分類において、DPとDU、DS、DFなどは明確に区別出来ない面もある。あるいは、もっと被検者の数が多くなれば、これ以外の型の答えが出て来る可能性もある。

以上のように種々の方法上の欠陥があるが、この研究はいわば試行的なものであり、自己というものが辞典に定義されているものよりも、はるかに、さまざまに各人に受けとられているという点で意義があったと思う。

IV 結 論

(1) 鍼灸を専攻する大学生、短大生、専門学校生、357名について、「自己とは何か、自分とは何か」という質問を出し、その答えを自由記述方式で白紙に書いてもらった。その答えは様々であったが、私の歴史(H, 8名)、自己概念などの自己の具体的内容(C, 123名)、願望として

の理想的自己(I, 23名)、一般的自己の定義(D, 203名)の4つのタイプにわけられ、さらに細く分けると11のタイプにわけられた。

(2) 自己についての答えの型と性との間に有意な関係はみられなかった。

(3) 自己についての答えの型と年齢との関係は、18~22才の青年後期ではCが有意に多く、Dは有意に少なかった。また、Hも少なかった。23~27才の大人の世界へ入る時期では、Dが有意に多く、Cが有意に少なかった。34~41才の一家を構える時期では、Iが有意に多く、Dも多く、Cが有意に少なかった。また、Cのうちでは、CTが18~22才で有意に多く、34才~41才で有意に少なかった。Dのなかでは、DPが23~27才で有意に多く、DUが18~22才で少ない傾向がみられた。

(4) 同じ被検者について施行したY-G性格検査との関係については、DUでは一般的活動性が有意に高く、支配性も高く、協調性や社会的外向性が高く、抑うつ性、劣等感が少ない傾向がみられ、安定したパーソナリティを示していた。また、Y-G 5類型のうちでは、D型が有意に多かった。

DQでは、一般的活動性が有意に低く、回帰性が有意に高く、抑うつ性や劣等感も高い傾向がみられた。DSでも、よく似た傾向がみられ、情緒の不安定なパーソナリティを示した。

(5) 同じ被験者の一部の者について施行したロールシャッハテスト集団法で得られたM反応の数と自己についての答えの型との関係は、すべて有意ではないが、I、D群でMが少し多く、H、C群で少ない傾向であった。「自己とは何か」という質問で答えられた自己は、ロールシャッハテストのM反応で表わされる、無意識的な、内的な豊かさである自己とは、多少異なるようであった。

文 献

- 1) Freud, S.: *Trieb und Triebchicksale*, 1915. 小此木啓吾訳: 本能とその運命, フロイト著作集 6, 第2版, 人文書院, 京都: 59~77, 1970.

- 2) James, W. : The principles of psychology, vol.1, Dover Publ. Inc. : 291~330, 1950.
 - 3) Jung, C. G. : Psychologische Typen, Rascher Verlag, 1960. 高橋義孝他訳 : 心理学的類型II, 初版, 人文書院, 京都 : 231~233, 1987.
 - 4) 片口安史 : ロールシャッハテスト, 心理診断法詳説, 14版, 牧書店, 東京 : 65~90, 1968.
 - 5) Levinson, D. J. : The seasons of a man's life, A. A. Knopf, 1978. 南博訳 : 人生の四季, 初版, 講談社, 東京 : 1980.
 - 6) Rogers, C. R. : A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships as developed in the client centered framework, 1959. 伊藤博編訳 : パーソナリティ理論, 第5章, ロージャズ全集第8巻, 第10刷, 岩崎学術出版社, 東京 : 165~278, 1975.
 - 7) 相良守次他監修 : 新版心理学事典, 初版, 平凡社, 東京 : 1981.
 - 8) Wilber, K. : The spectrum of consciousness, The Theosophical Publ. House, 1977, 吉福伸逸他訳 : 意識のスペクトル, 2, 初版, 春秋社, 東京 : 128~175, 1985.
- 以下は「自己」という項目が記載されている辞典のリスト.
- 9) 加藤正明他編 : 精神医学事典, 初版, 弘文堂, 東京 : 244, 1975.
 - 10) 加藤正明他監修 : 精神科ポケット辞典, 第5刷, 弘文堂, 東京 : 83, 1986.
 - 11) 北村晴郎監修 : 心理学小辞典, 初版 協同出版, 東京 : 79, 1978.
 - 12) 小林利宣編 : 心理学辞典, 増版第2刷, 北大路書房, 京都 : 185~186, 1987.
 - 13) 黒田実郎監修 : 乳幼児発達事典, 第1刷, 岩崎学術出版社, 東京 : 177, 1985.
 - 14) 松村康平他編 : 児童学辞典, 3版, 光生館, 東京 : 244, 1980.
 - 15) 村山貞雄監修 : 幼児保育学辞典, 初版, 明治図書出版, 東京 : 280, 1980.
 - 16) 大槻憲二編著 : 精神分析学辞典, 第2刷, 育文社, 東京 : 133, 1972.
 - 17) 大山正他編 : 心理学小辞典, 第13刷, 有斐閣, 東京 : 105, 1986.
 - 18) 新福尚武編 : 精神医学大事典, 第1刷, 講談社, 東京 : 312, 1984.
 - 19) 園原太郎他監修 : 心理学辞典, 初版, ミネルヴァ書房, 京都 : 146~147, 1971.
 - 20) 外林大作他編 : 誠信心理学辞典, 第7刷, 誠信書房, 東京 : 174, 1987.
 - 21) 内山喜久雄監修 : 情緒障害事典, 第8刷, 岩崎学術出版社, 東京 : 152, 1982.
 - 22) 内山喜久雄監修 : 児童臨床心理学事典, 第1刷, 岩崎学術出版社, 東京 : 238~240, 1974.
 - 23) 牛島義友他編 : 教育心理学新辞典, 5版, 金子書房, 東京 : 346~347, 1975.
 - 24) 依田新監修 : 新教育心理学辞典, 初版, 金子書房, 東京 : 307~308, 1977.